哲学堂祭記念講演会
昭和62年11月7日（土）
東京都　中野公会堂

「日本人の国際感覚」

作家　三浦朱門

三浦でございます。東洋大学の100周年盛挙を記念する、このような会合にお招きいただきまして大変光栄に存じています。

百年というのは決して短い時間ではございません。今年で、恐らく、日本が長い鎖国を解き、開国して、ざっと百二十年であろうかと思います。その百二十年の間に、外国というものが、何も日本とつながりのない遠い遠い国であった、遠い遠い存在であった時から、飛行機に乗れば、あっという間によその国へ行ける、そして、毎年、われわれの同胞が、百万単位でよその国へ行く、そういうような時代にまで変わってきた時代であります。

百二十年間というのは長い時間ではありますけれども、一面、何も外国について知らなかったわれわれが、そのような近いものとして外国を感ずるというまでになるためには、決して長過ぎる時間ではありません。むしろ短過ぎたかと思います。そこで、私たちの考え方の中に、さまざまな混乱が生じたような気がいたします。

俗に、昔から唐、天竺と申して、あるいは三国一などと、唐、天竺と大和の中で一番ということを言いましたが、唐、天竺というのは、遠い遠い異国ということであって、実際問題として、私たちは、具体的に唐とか、天竺へ行った人を身の周りにもっていたわけではありません。そして、異国というのは、常に、私たちにとって、憧れであったり、あるいは何が何だか分からない異質のものであったり、そういう時代が長く長く続いておりました。

明治の末ごろだと思いますが、カール・ブッセという人の詩が日本で有名になりました。カール・ブッセという詩人は、名前から言うとドイツ人でしょうけれども、恐らく、西洋の文学史や、ドイツの文学史にはあまり残っていないでしょう。日本でもカール・ブッセのただ一つの詩「山のあなたの空遠く　幸い住むと人のいう　ああわれ人と尋めゆきて　涙さしぐみ帰りきぬ」、この詩が非常に有名でした。山のあなたの空遠く、あるいは海の彼方のはるかなとこをと、何か素晴らしいものがある、それが私たちの長い長い伝統的な外国についての考え方だったと思います。

良いものはいつも海の向こうからやって来ます。恐ろしいものが来たというのは、日本の歴史では、恐らく、元寇の時の前後の時間だけだと思います。あるいは今から千年ぐらい前になりますか、白村江のたたかいに敗れて、新羅の軍隊が攻めてくるかもしれないと日本人が危機感を持ち、今の九州の太宰府のあたりに防御を固めた時期があります。そのような時代には、異国というものに対する不安があったかも知れません。しかし、それ以外の時代、私たちは、常に海の彼方に憧れと夢を持ち続けております。

昭和十年代に亡くなった横光利一という文筆家がいます。その人の代表的な作品で「旅愁」というのがあります。この小説は、つまり、日本文化と西洋文化の対立、そして、どのような形で、われわれはより高度な文化的な段階に達し得るか、というような問題を取り扱ったものだと思いますが、その中で、主人公たちがヨーロッパに行くくだりがあります。また、事実、横光利一は、この小説を書くためにヨーロッパに行っております。ですから、主人公の考えというのは、横光利一のそれと重なっているかと思います。

そのころ、私たちの周りの人が、日本人がヨーロッパに行くというのは、長い長い間、船に乗ってヨーロッパに行きます。そして、まず上陸するの

が、スエズ経由だとマルセイユ。小説の主人公がマルセイユに上陸しますと、そこで見るフランス人たちを、何かこう理想の国の人のように思います。例えば、男は全部哲学者のように思うし、女性は全て天女のように思える。そして、街角に放り出してある葡萄酒の樽までも芸術的な形をしていると思って圧倒されてしまいます。

マルセイユというのは、地中海に面したフランスの港です。今、多くの日本人がマルセイユという言葉で思い出すとすれば、マルセイユというのは麻薬の密輸のルートである。犯罪者の巣として映画や小説の舞台になる場所であるというようなこととか、今、フランス人というと、この瞬間で、一番明確に思い出すのは、フランスの名画を盗み出したり、日本で三億円かっぱらったりする人のいる、あの暗い国だという写真が新聞に出ています。

あの新聞の写真を見ていると、横光利一の主人公たちがマルセイユに上がって「フランス人は全部哲学者のようだ」といったり、「フランスの女性は天女のようだ」と思ったということは、本当に、今から思うと、夢、幻のような気がいたします。

つまり、そのころの日本人の考えたフランスというものと、現実に、私たちが、さまざまな形で知っているフランスというものは違う。いや、実際にフランス人が全部泥棒だというわけではありません。もちろん、フランス人の中には、泥棒もいるでしょうし、学生もいますし、商売している人があり、ありとあらゆる人間がいます。その意味で、日本もフランスも同じであります。

ですけれども、とにかくマルセイユに上がって、フランス人を全て哲学者、あるいは天女のようにも思うという人たちは、最早いません。むしろ、マルセイユに上がって「これはゴミゴミした、しょうがない街だ」と思う人のほうが多いのではないかと思います。

では、そのような形になる。つまり、フランスというものに対して、もっと現実的な見方をすることが出来るようになる。これは、果たして進歩というのだろうか。あるいはこのようなものの考え方の違いを止揚した次元で、何かもっとしっかりした外国に対する見方があるのでしょうか。その点については、私、ちょっと心もとないことがあるように思いますので、しばらくお話申し上げたいと思います。

日本で最も人気のあるテレビの番組の中で「大岡越前守」とか「水戸黄門物語」というのがあります。水戸黄門にしても、大岡越前にいたしましても、あるいは、あらゆる時代劇というのは勧善懲悪なんですけれども、その悪というのは、誰にとっても自明のこととして受け取られる悪なんです。そして、悪というのは、なかなかしぶとくて、自分が悪いということを認めない。

しかし、それがのっぴきならない証拠を突きつけられると、入れ墨判官であれ、大岡越前であれ、水戸黄門であれ、あるいは「三匹の侍」であれ、その具体的な証拠の前に屈伏する。それが日本の裁判劇の日本的なものであります。「悪い奴は悪い」、そして、その悪については、最早、問題の余地がない。それが私たちについての基本的な考えだろうと思います。

「水戸黄門物語」などは程度が低いドラマで、それとまともな西欧の舞台芸術を比べてはならないという非難を敢えて無視して考えてみますと、ヨーロッパの裁判劇の代表的なものとして、日本の誰もが知っているもの

として「ベニスの商人」というのがシェークスピアの作品があります。

「ベニスの商人」は言うまでもなく、題材こそベニスですけれども、英国で上演された。したがって、そこの問題はベニスの問題、ベネチアの問題であるばかりでなくて、英国の問題でもあったと考えてよろしいと思います。シャイロックというユダヤ人の商人が、キリスト教徒に金を貸す。シャイロックから金を借りたキリスト教徒が、借金は払えなくなる。その時に、契約書に「胸の肉一ポンドを抵当として差し出す」という条項がある。シャイロックは、それを盾に取り「胸の肉一ポンドを寄こせ」という。

その時に、裁判官に化けた、キリスト教徒の婚約者で、ポーシャという美しく、賢い女性がシャイロックを諭すのです。「情けは緑を呼ぶ春の雨のように、本当に豊かなものなんだ、お前もまた情けのある男性でなきゃならん」というようなことを言う。シャイロックは、あくまでも抵当権の執行を要求する。で、ポーシャは「それでは仕方がない、お前の言う通り胸の肉一ポンド切り取ってよろしい。ただし、その契約書には、血一滴たりとも出していいとは書いてない。血を出さずに肉を切り取れ」。そこで、シャイロックは困ってしまって、訴えを取り下げて、しおしおと帰って行くわけです。

大岡裁判と「ベニスの商人」との根本的な違いは、大岡裁判、あるいは入れ墨判官でも何でも同じですけれども、日本の裁判劇の場合には、悪い人がはっきり分かっている。しかし、「ベニスの商人」のシャイロックの場合は、決して悪いことをしたが故に罰せられたのじゃありません。シャイロックは、彼の言い分としては全然間違っていないわけです。ただ契約に不備があった。契約に不備があったからシャイロックが負けたに過ぎない。

ここでは「ユダヤ人の考え方は悪いんだ、ユダヤ人は悪いんだ、ユダヤ人はけしからんのだ」という前提はありません。ユダヤ人と言えども、キリスト教徒ときちんと契約を結んで、その契約の範囲内でなら、その契約の正当な履行ならば、これは平等の人間として許されるという考え方があります。

言い換えると、ユダヤ人のものの考え方およびキリスト教徒のものの考え方、これが一つの社会の中で、同時に平行して存在し得るのだということが、シェークスピア劇の前提にあるわけです。

したがって、第二次大戦の少し前に、ドイツにナチズムが起こって、ユダヤ人の存在それ自体が悪なんだ。彼らの存在も、命も、彼らが生み出した文化も、彼らが持っていた富も、一切抹消しなければならないということは、そういうシェークスピアの「ベニスの商人」にあるような、違う考え方を持った人間が同じ社会に住むという考え方と全く対立するものであります。

したがって、ナチスの考え方は、ヨーロッパの人々から言いますと、野蛮な、非文明的な、人間の長い文化の蓄積を否定するような考え方だということになるわけです。もしシャイロックの「ベニスの商人」の考え方が正しく、ナチスの考え方が悪いとするならば、日本の裁判劇にあるような「悪いものは悪いんだ」、全部が同じ価値観、同じ善悪観を持っていなきゃならないとする考え方、これはいつでもナチスと同じような、強熱的なナショナリズムに転化をするかも知れない、少なくとも外国人は、そのように恐れるのではないかと思います。

私は、それでも「ベニスの商人」には大きな嘘があると思います。それは何か、というと、ユダヤ人は決して抵当、抵当としてキリスト教徒の肉を要求したりなんかしない。そう考えたところに、むしろシェークスピアの、ユダヤ人に対する偏見があるかも知れません。彼らは、そんな役に立たないものを要求しません。ユダヤ人ではありませんけれども、中国人の商人の話をします。

私の同級生の一人で、昭和三十年ごろ、三十年代の前半に、ベトナムで貿易をしていた男がいます。もちろん、独立して貿易していたのでなく、ある小さな商社に入っていたわけです。ところが、彼の落ち度では全くないのですけれども、日本の国内の繊維の相場の変動によって、昭和三十年代というのは、本当にそれまで二十年代までは日本の産業の担い手だった繊維とか、石炭とかいうものが、業種が没落した時代なんです。その私の友人が勤めている会社が、日本においてつぶれてしまった。

彼は気がつくと、非常に多くの債務を、会社の名前の債務ですが、背負って、たった一人でサイゴンにいることに気がついた。銀行の預金はもうほとんど残ってない。それでも日本に帰る切符代ぐらいは何とかなる。しかし、会社がつぶれたということを知ると、自分の周りに何となく尾行している人間がいて、自分の行動が監視されてるのです。

私の友人は、手持ちの金で拳銃を買いました。拳銃をポケットに入れて、そして最大の債権者である中国人の商人のところへ行ったわけです。ポケットから拳銃を出すと、債権者は、一瞬、顔色を変えた。日本人というのは荒っぽいから殺されると思ったのです。

私の友人は、拳銃を逆にして、つまり、把手を向こう側に回して机の上に置いた。「自分は、これまで貴方と信頼に基づいて商売をやってきたけれども、会社がつぶれてしまった。自分としては、あなたの信義に背くことは残念なことだけれども、最早、借金は払えないことになった。だから、この拳銃で俺を打ち殺してくれ」。

そうすると、しばらく、その中国の商人は考えて、「あなたを、今、私が拳銃で打ち殺したところで、あなたに貸した金が返るわけじゃないじゃないか。そんな無意味なことを私がすると思うか。幸い、あなたは日本の商法、あるいは商業の習慣に通じている。だから、しばらく自分の下で働いてくれ。そうすれば、私は、あなたの知識および労力によって、その損を立派に取り返してみせる」。そして、彼は二年間、中国人の商人の下で働いて、会社の借金を返して日本に帰ってきました。落語に「居残り左平次」というのがありますけれども、それのような話なんです。

私は、これで面白いと思ったのは、日本人が、最早、払えないという時に、拳銃を持って行って「これで俺をぼんとやってくれ」と言いました。これは、私ども戦争中の世代だということもありますけれども、玉砕精神、バンザイ突撃の精神から、まだ自由になっていないということだと思います。

しかし、同時に、中国人のほうが「お前を殺したって金が返るわけじゃない。それよりも、お前の能力、知識を利用して俺のために働いて、そして借金を返してくれ」、そういうほうがはるかに現実的だと思います。

恐らく、ユダヤ人というのは、そういう人たちであって、抵当として胸の肉一ポンドなどを要求する人じゃないんだろうと思います。また、そのような契約書を結んだからといって、ユダヤ人は、その抵当権を執行しよ

うということを恐らく言わない民族だと思います。

とにかく、私たち、皆さんもそうだと思いますが、何らかの形で保険に入っています。火災保険なら火災保険証というのがあります。私たちは表だけ見て「火事になったらば、これで何千万円くれるんだ」なんて簡単に思っていますけれども、その保険証を裏返して見ると、虫眼鏡でも読めないような字で、びっしり第一条、第二条、第三条と契約が書いてあります。その契約が書いてあることは、具体的に何が書いてあるかというと、この時には払いません、この時には払いません、この時には払いませんということが書いてある。

なぜ、こういう契約が出来たかというと、例え話ですが、シャイロックとキリスト教徒のようないろいろな間のトラブルがある。そのようなトラブルを何百年の間繰り返した結果、全然ものの考え方の違う人たちでも、同じルールで暮らしていけるような、同じ社会で暮らしていけるために、そのような万遺漏ないような契約書というものが出来たわけです。

ところが、日本人たちの間では、長い間、契約書なんて必要ありません。むしろ、契約書などというものを作るのは水臭いことである。私たちの場合で言いますと、小説を書くという時に、電話が掛かってきて「正月号のための短篇をお願いします。四十枚ぐらいなんですが」「はい、分かりました」というと、本当にそれで済んでしまう。電話の声とか、声の調子とかいうもので「あれは誰だ」ということが間違いないと私たちは分かるわけです。そして、向こうのほうも「はい、書きます」といえば、別に契約も何もなくても「大丈夫なんだ」と思っている。そういう形で何の契約もなしにお互いにうまくやってきた。それが私たちの世界のルールです。

それから出版社でも、年末闘争などがあってストライキをします。その時には予め電話が掛かってきて「明後日が締切りで原稿をいただきに行く日なんですけれども、生憎、その日がストライキなもんで、私の代わりに編集長を伺せるから、よろしくお願いします」ということで電話が掛かってくる。つまり、ストライキをするんですけれども、ストライキをやっても、なお雑誌というのは作んなきゃいけないんだ。そして、主筆なり編集長が行けば、あの人は驚くに違いないから、驚かさないようにしておかなきゃいかんというような配慮がある。ストライキをするということは、ちょうど「明日は、私、結婚式で、ちょっと出られませんから」というのと同じような仕事の一部として入ってくるのです。

こういうような世界というのは、編集者も編集長も、出版社の社長も、書き手も、読者も、これは同じ世界の人間、同じ価値観を持つ人間なんで、お互いにストライキしたり、ストライキをしなかったり、書けなくて迷惑を掛けたりなんかするけれども、所詮は、共に文学を愛するという意味では、同じ人間なんだという無条件の考え方がある。つまり、保険の契約書と全然反対側の考えです。

ですけれども、こういうことではいけないというので、私たちは、だんだん契約書を作ることを周りから勧められて、たまにということは、一年に一度か二度ぐらい契約書を作ることがあります。ある特定の出版社は、ものを出版する時に、契約を作り、契約書を作ります。それは、多くの場合、その本を他の社から出されることが困るという意味で作るんですけれども、とにかく、何の誰がしを甲とし、何とか何とか出版社を乙としというようなことで、甲は乙に何とかするものとするなんていうのがずっとあ

るわけです。そして一条一条「ふんふん、なるほど」と思って読んでいきますと、一番最後に、大体、決まりきった契約書の条項なんですけども、「甲乙相互に意見の相違があった場合には、双方善意をもって相談して解決するものとする」と書いてある。

この一番最後の条項ぐらい外国人に分からないものはないと思います。つまり、問題があった時に、甲乙双方が善意をもってこれに臨んで、相談して決めることが出来るとするならば、そもそも契約書なんて全然必要ないんです。つまり、私たち契約書をずっと作っていますけれど、基本的に、依然として契約なんていうのを信じていません。私たちは、仲間っていうのは同じものなんだ。同じ倫理観を持っている。同じ価値観を持っている。そういうことを信じて疑わないのです。

例えば、秋田県の人と、鹿児島県の人が、それぞれ小学校時代に友達としゃべっていたような言葉で話し合おうとすると、全然話が通じません。別に秋田県と鹿児島県ほど広がっていなくても、熊本県と鳥取県では、もううまく話が通じません。

実は、この間、国民文化祭というのがあって、その中の催しの一つとして、それぞれの土地の言葉による、その土地の問題を扱った芝居というのをやりました。そうすると、熊本の子供たちの生活を扱った芝居は、もう鳥取県の人にも、大阪の人にも、東京の人にも全然理解出来ません。聞き取れません。そのくらい言葉は違います。しかし秋田県の言葉も、鹿児島県の言葉も、沖縄県の言葉も、新潟県の言葉も、全部同じ日本語だと思っています。そして、日本語だということを私たちは疑っておりません。そして、共通語といわれるＮＨＫのアナウンサーがしゃべる、ああいう言葉になるべく近づけてしゃべるように努力する。

普段、小学校の友達としゃべる時には、あたり前の言葉なんですけれど、いくらか正式の場に出た時には、あるいは自分の土地の人でない、出身地も違う人たちとしゃべる時には、なるべくＮＨＫのアナウンサーの言葉と近い表現でしゃべる。そうすることによって、大体、意思を通ずることが出来る。だから日本語は一つなんだと、私たちは信じております。

私たち、スペイン語というのは、たった一つの言葉だと通常考えている。しかし、私たちが現実にスペインに行きますと、私たちがスペイン語だと思っていた言葉を、彼らは、それはカステリア語だと言う。では、スペインにほかの言葉はあるかというと、バスク地方にはバスク語というのがあります。これはかなり違うほうです。カステリア語と大変に似ているのですけれども、地中海に沿ったあたりにカタラン語というのがある。カタロニア地方というのがあって、そこでしゃべる言葉はカタラン語です。車で走ってカタロニア地方に行くと、カステリア語とカタラン語と両方で書いてある。つまり、高速道路降り口なんていうのは二つの言葉で書いてある。ある区間に一か国語で書いてあるとすると、その百メートル後ろに別な言葉で同じ主旨のことが書いてある。

私どもが聞いたって、カタラン語とカステリア語はどう違うか分かりませんけれども、目で見た限りにおいては、カタラン語というのは、カステリア語とフランス語との本当に中間みたいな言い方をしているわけです。出口というのは、フランス語でソルティというような言い方をしますし、カステリア語ではサリダ、カタラン語というのは、その二つの綴りのちょうど中間みたいな書き方をします。

つまり、スペインという国の中に二つ以上の言葉があって、それをあたり前なことだと思っている。バルセロナも古くから文化の中心ですけれども、バルセロナの博物館に行って、何か解説書みたいのを買おうとしますと、カタラン語のしかない。カステリア語のはない。ましてや英語のものはない。私は困ってしまって「貴方たちの学校ではカステリア語を教えるのか、カタラン語を教えるのか」と言ったら、「小学校では両方やるんだ」というような言い方をしてました。

しかし、カステリア語とカタラン語の人たちはお互いにしゃべり合って通じないかというと、そんなことはないようです。多分、東京地方の言葉と大阪地方の言葉ぐらいしか違わないんです。それどころか、船の上でスペイン人とイタリア人がそれぞれの言葉でしゃべっていて、しかも、何となく話が通じているのを脇で見ていたことがあります。

私は、このごろ地中海にわりと興味があって、アレキサンドル・デュマの「モンテクリスト伯」なんていうのを喜んで読んでいるのですが、あの主人公のエドモン・ダンテスという若者の恋人がメルセスという娘で、それがマルセイユの近くのスペイン村にいる。スペイン村にいるといっても、これは、恐らく、カタラン語をしゃべっている人たちの集団に違いないんで、そういう人たちは、マルセイユのこっちの人と、それほど苦労せずに話し合いが出来るに違いない。

そういうことを考えると、彼らは「違うんだ」ということを言いながら、実は、私たちの目から見ると大変に近い、似たような状態のようです。そして、私たちは「同じだ、一つだ」といいながら、彼らの目から見ると、大変違うんじゃないでしょうか。

今から二十五年ぐらい前に、夫婦でスコットランドをドライブしたことがあります。田舎町へ行くと、宿屋なんかありませんから、日本の今ごろの言い方で言いますと、民宿というところに入るわけです。「Bed & Breakfast」という看板がある。そこに入っていきます。

そうすると、大きな帳簿に、宿帳ですけれども、そこに名前と住所を書けという。名前と住所を書いて一番最後に国籍というところがある。われわれは、もちろん、日本と書くわけですけれども、前の人の国籍というのはどんなのが書いてあるかと見ると、ブリティシュとか、ウェールシュとか、スコットとか書いてある。つまり、ブリテン人、ウェールズ人、スコットランド人という意味です。

私たち、イギリス人というのは、アイルランドは違う国であることを主張して独立しましたし、また、今、英領のアイルランドの一部も、アイルランドになるべきだといって、激しいたたかいを繰り返していることは知っています。ですけれども、スコットランドとウェールズと、それからイングランド、その三つの部分は、とうの昔に一つの国になったんじゃないか。そして、三つの国旗を集めてユニオンジャックという英国の国旗が出来たんじゃないか、と私たちは思っています。

しかしながら、今に至るまで、国籍はというと、スコットランドとか、ウェールズだとか、あるいはブリテンだとかいうことを主張し合っている。彼らは三つの国、別々の国なんです。にもかかわらず、戦争になると、彼らは同じ旗を立ててわれわれとたたかった。こんなのを一体考えますと、日本というのは、一つの国だといっているのは、これは一つのフィクションなのかも知れません。実は、われわれの中にいろんな要素があるのを、

私たちは、それを敢えて黙殺して、無視しているのかも知れません。

明治の初めに、日本にやって来たモースという生物学者がいます。東大の先生になった人ですが、モースという人が私たちにとって大事なのは、むしろ、先史時代のいろんな遺物、例えば、大森の貝塚というのを初めて発見してくれた人、そういうように考えたらよろしいかと思います。そのモースの日記というのが、いくつか翻訳が出ているはずですが、その中に「日本人には二つの人種がある。一つを長州人といい、一つを薩摩人という」「長州人というのは色が白くて、面長である。それに対して薩摩人というのは、色が黒くて、丸顔で」というようなことを書いてあります。

私たち、別に、モースの言うことが正しいと思う必要はないのです。また、日本の人種の中に、長州人と薩摩人という二つの人種が混ざったと考える必要もありません。私たちは、日本人というのは、いろんな変化形はありますけれども、要するに、日本人は日本人であって、目で見れば、日本人であるかどうか分かると、私たちは勝手に自惚れております。その意味で、日本人というのは単一なんだと思っています。

ところが、外国人から見ると、日本人というのは単純な、人種的な背景をもった民族とは言い難い。いろんな民族の血が混じり合って、共通の文化を作り上げてきた民族なんだ。南方系の血もあるし、大陸から来た血もあるし、あるいは北海道から来た北方系の血もある。いろんな血が混じり合って、そして、それぞれの人種的な特徴をそれなりの形で表現しつつ、多くのバリエーションを持った人間の集団、これが日本人です。

別な言い方をすると、もし日本がヨーロッパにあったならば、日本というのは、たった一つの国ではなかったかも知れません。いくつもの国に分かれていたかも知れません。また、いくつかの国に分かれてもよいだけの大きな変化形をもっています。肉体的にも、文化、言葉の形のうえから言っても、多くのものをもっています。しかし、私たちは、日本というものを、一つのものであるという作りばなしを、フィクションを信じました。フィクションを信ずることによって、私たちは日本という民族を作ってきたわけです。

つまり、日本人というのは、先祖を手繰ると、皆、天皇陛下の私生児の子孫、あるいは神代に出てくる八百万の神がみの子孫ということになってきます。こんな馬鹿なことがあるわけがありません。われわれの先祖は、本当に地球上のさまざまなところから集まった人の血が、アジア大陸の吹き溜まりのようなこの列島に集まったわけです。

ただ日本人が一つだということを意識し、そのフィクションを信じますと、その内部では限りない了解事項が成立するはずなんです。ここでは、契約もいりません。犬養毅という総理大臣は、自分を暗殺しようとする武器を持った人間たちが来た時に「話せば分かる」といって積極的に出て行きました。暗殺者に向かって「話せば分かる」といって出て行った人は、恐らく、世界中、犬養さんぐらいのもんだと思います。なぜかというと、日本人なんです。日本人であるが故に共通項が発見出来る。共通項があれば、お互いに殺すの殺さないのといわなくとも済むはずだ、そういう考え方が犬養さんのそこにあったと思うんです。

私たちの国際感覚というのも、ややもすれば、日本人というものを拡張して世界に広げるような行為。悪く言うと、戦争中「八紘一宇」という標語がありまして、全世界を住処とするということですけれども、しかし、

ちょうど、九州の人が、四国の人間も違うけれども、あれも日本人だ。中国地方の人間もわれわれと違うところがあるけれども同じ日本人だ。中部地方、関東地方、東北地方の人間も、われわれと違うところがあるけど同じ日本人なんだというようにして、一つのものを発見していきます。

それと同じようにして、朝鮮半島の人たちも、いろいろな面でわれわれと違う部分があるけれど、われわれと同じ人間。中国の人も、東南アジアの人も、インドの人も、ヨーロッパの人も、アフリカの人も、いろいろわれわれと違うものを持っているけど、人間として「同じなんだ」という結論を導き出して、それによって、ほかの人を、ほかの人種を、ほかの民族を、自分たちの仲間だと考えようとする精神です。このような考え方、このような方法というのは、大変特殊であるかも知れません。そのような方法によっては、広げうる仲間とかいうものは限界があるかも知れません。

つまり、シェークスピアが「ベニスの商人」を書いたころから、彼らのヨーロッパ社会の中では、絶対違う人間、しかし、一緒にやらなければいけない人間。そして、共通の部分を、双方で作っていかなければならないというような意識、つまり、同じものがあるということではなくて、違うだろうけれども、違うもの同士の間に共通なものを作っていこう、建設していこう、そういう考え方があります。共通のものを建設するというのが、例えば、契約です。全然、人種の違う、宗教も違う、宗教の違うというのは、ものの価値観、違う形而上学を持っているということです。全然、宗教も違う、民族も違う、文化的な背景も違う、それらの人間が一緒にやっていくために、共通のものを作り上げていく。それが、例えば、契約書というものだと思います。

「ベニスの商人」などというのは、遠い遠い昔のことかというと、そんなことはありません。今日でも、まだそういうことがたくさんあります。例えば、今、レバノンなんて恐ろしくて行けませんが、まだそれほど恐ろしくない時に、日本人のグループが車に乗ってドライブしました。朝、出る時に、冷却器に水を十分入れていなかったもので、オーバーヒートして、しかたがないのでエンジンを日陰の方に向けて、ボンネットを開けて、エンジン空回しして、エンジンの温度が下がるのを待っていました。すると、一人のアラブ人がやって来て「俺はこの近くに井戸があるのを知っている、場所を教えるから十ドル寄こせ」という。

日本人は、大体、彼らが高く吹っ掛けるということを知ってますから「十ドルは高い、五ドルに負けろ」、アラブ人は四の五の言いますけど、結局、五ドルに負けたわけです。日本人はもう一押し尋ねた。「本当にそれは近いのか」「ある程度、遠かったらばもう金は払わないぞ、本当に近いのか」「約束が違うと思ったら払わなくてもいい」という。

日本人は、自動車からあまり遠く離れたくなかったのです。不用心ですから。で、アラブ人について行くと、本当に自動車からそう離れないぐらいのところに、街からそう離れないところに井戸があります。その井戸の側に行くと、アラブ人が「じゃ、約束の五ドル寄こせ」で、五ドル渡すわけです。そして、日本人がバケツで水を汲もうと思ったら、水がありません。すると、そのアラブ人が、日本人に向かって「私は井戸があるとは言った。しかし、水があるとは言わなかった」。

これは、「ベニスの商人」の時に、裁判官が言った論理とほとんど同じ理屈なんです。契約書には胸の肉一ポンド切り取っていいと言った。しか

し、血を流してもいいとは書いてない。その論理と全く同じなんです。

私はこれを「アラブ人が狡いんだ」とは思いたくないのです。アラブ人はそこに井戸があることを知っていた。しかし、水があるかどうかに自信がなかった。水がある時もあるし、無い時もある。水があるということを、彼が、もし確信出来たならば、何がなんでも十ドル寄こせといったかも知れない。水があるか無いか分からなかったから、五ドルに負けたのではないでしょうか。

もう一つ例を挙げますが、遠藤周作という男は日本ではノーベル賞を貰うのに一番近い偉大な芸術家だと思います。

しかし彼は一面愚かな男でして、どのくらい愚かしいかと申しますと、このごろファクシミリというのがありますが、こちら側で書いたもの、手書きであろうと、印刷であろうと、図形であろうと、それを機械に入れて電話のダイヤルすると、向こう側に受ける機械があれば、こちらの手書きと同じようなものが向こう側に出てくる。そういう機械を私ども原稿を出版社へ時に送るために、だんだん整備するようになりました。ある時、遠藤から電話が掛かって「どうしてファクシミリというのはああなるのか、原理を教えろ」というんです。ですから、私はマイクロホンの原理から始めて、炭素の屑を集めて、そこに圧力を加えると、電気がよく通じたり、通じなかったりという状態が、それが波になってつながっていく。それが基本的なものである。その次ぎに、半導体、あれ本当に英語でセミコンダクターというけども、半分電気が通って、半分電気が通らないものであって、これを使って、どうやって相手に伝えるかというようなことを説明し始めると、遠藤は「そんなこと言うても、俺、分からんから、もっと簡単に言うと、どうして講談社で紙を入れてやると、針金を伝って、その紙が俺んところまで来るんだろう」と言うのです。だから「いや、紙はお前の機械にある紙であって、その紙に印刷すべき内容が電気の符号になって講談社から電話線を伝ってお前のところに来るだけなんだ」といいますと、彼は突然、怒り出して「じゃ、講談社は俺に断りなしに俺の紙を勝手に使うとるんか」。こういう時の遠藤というのは、全く、これは本当に中学校で物理を勉強したんだろうかと思うんです。

また、ある時は、「俺は、とっても運がいい」。「なぜ運がいい」と言いますと、「俺は今まで電気のプラグをソケットに何万回差し入れたか分かんないけども、プラスとマイナスを間違えたことがない」というんです。私は驚いてしまって「お前、電気の交流というのを習った覚えないか」。じぃーっと考えこんで「お前が言う以上は、多分、学校の物理の時間に教えたに違いないんだけども、俺は全く記憶がない」。

そういう男ではございますけれども、むしろ、小説などというのは、少しおかしい人間の方が書けるものでありまして、私の才能の無さは、遠藤に比べて、あるいは女房の曽野綾子に比べて、はるかに物理でも数学でも出来るようなことが才能の無さだろうと思っております。

その遠藤と一緒に聖地に行きました。キリストは「ナザレのイエス」というように言われています。ナザレで生まれたわけではありませんけれど、キリストの母親がマリア、そして法律上の父親の役であるヨゼフという人たちがナザレの出身である。したがって、ナザレのキリストと俗に言われるわけです。

ところが、現実のナザレというのは、今ではアラブ人の町であって、ナ

ザレへ行くと、キリスト教の土産物類を売っています。そのほとんどはアラブ人です。

たまたまアラブの行商人がやって来て、あやしげな石を連ねた首飾りを持って来て、遠藤に買えと言う。あそこは、やはりポンドという貨幣単位だったと思いますけど、面倒臭くないように日本の円に翻訳して言います。値段聞くと、一万円だって言う。遠藤は、とにかく、こういうのは値切りゃいいということを知っていますから、大体、日本人は、値切りゃいいというと、まず半分に値切るんです。遠藤は五千円に値切った。そうすると、向こうは九千円という。遠藤は、いや五千円だという。向こうが、だんだん、だんだん負けてきて六千円までやってきた。そして、遠藤は手を打ったんです。で、六千円で買った石の首飾りを得々と首から掛けて、ふと見ると、側の店では、何と、同じ首飾りを千五百円で売っています。

彼は激怒して「あの野郎、どこへ行った」というと、その行商人は、すぐ側にいて、ニコニコしてやって来て、遠藤と握手しながら「ここの店の親父は、この首飾りの値段を知らんのだ。お前はいい買い物をした。おめでとう」と。その時、遠藤は呆気に取られて、ぽかんとしたのですけれども、私は、その商人をやはり憎めません。

なぜかというと、私たち、例えば、古道具屋で六千円の皿を買ったとします。六千円だけども、これは洗って綺麗にすればかなりいい値のもんじゃないか。つまり、ちょっとしてオークションに出せば、二万円や三万円になると思うことがあります。つまり、いわゆる掘り出しものです。その時に私たちは、平気で二万円、三万円の値段の皿を六千円で買ってきて「あぁ、掘り出しものをした、儲けた」と思います。

つまり、一つの皿の値段というのはあるようで無いんです。これを六千円と見るか、二万円と見るかというのは、その人の鑑賞眼とか、その人のそれを必要とする度合いによります。一杯の水、飲み水というのは、ある状況ではただです。しかし、ある状況では何千円払ってでもその一杯の水を飲みます。

ですから、ものの値段というのは、大変主観的なものなんです。その店で千五百円で売っている首飾りを、その行商人が一万円で売っても悪くはない。それを五千円と値をつけようが、六千円と値をつけようが、五百円と値をつけようが、それは買い手の問題なんです。その買い手の問題について、売り手がそれに同意すれば、買い手の値段でそれを売るでしょう。あるいは売り手の値段が自分の見出した、自分の判断した値段以上ならば、買い手はそれを買いません。要するに、それだけのことだと思います。

私たちは、商売というのはうっかりすると騙されるものだと信じ切っている。したがって、同じ商取引によって損したり、得したりするのはいけないことなのです。そこで、値段は均一でなきゃいけないとします。あるいは定価を表側に出しておかなきゃいけない。

多分、こういうことを始めたのは、大正時代のデパートだと思いますが、それまでは、みんな呉服屋さんでも、掛けの買いをしたり、買ったりして、そして、「あの店は古い知り合いだから、別に絶対いんちきはしないんだ」というようなことで、商人との間で特別な関係を結んで、取り引きをしてきました。

私の祖母は嘉永六年、ペリーの日本にやって来た時に生まれた人ですが、私の母の言うことによると、大正時代、デパートへ行きますと、越後の女

ですから、これいくらいくらですというと「負けやっせぇー」負けろというんです。それで、私の母は本当に「あのばあさんと一緒に買い物に行くのはいやだ、いやだ」と言うのです。つまり、定価というものが出来たのは、大正時代なんです。

ところが、考えてみると、あの定価ぐらいおかしなものはない。例えば、トヨタ自動車というのは、豊田で造っているとします。そうすると、豊田で二百万円の車が、東京でも二百万円というのは考えてみるとおかしい話です。東京へ持ってくるまでに運送費が掛かる。運転する人の運転代が掛かる。燃料費が掛かる。あるいは、その間に事故を起こすかも知れないという危険、したがって、保険が掛かる。そういうものがあるにもかかわらず豊田市で買っても二百万円、東京で買っても二百万円というのはおかしいと言えます。

本だって、東京の出版社で、東京の印刷所で出来る。東京で買って千円の本が、沖縄でも千円というのはおかしいじゃないか。向こうは輸送料が掛かっているはずだ。だから、沖縄でも千円、東京でも千円というのは、東京で本を買う人が沖縄の分も負担しているんだとも、考えようによっては言えないことはないのです。しかし、私たちは、日本は同じ一つの国なんだ。だから、ここでは同じルール、同じ定価、同じ価値観、同じ倫理観が通用するはずだと固く信じて疑わないわけです。

始めに言いましたけれども、日本人が外を見る目というのは、山のあなた、海の彼方の、夢、幻のような世界としての世界観、外国観というのがあります。私も子供のころ、ハリウッドの映画を見ていて、立派な建物が見えるのは、あれは全部セットなんだということを聞きまして「そうか」と思う。それと同時に、われわれはニューヨークやなんかの映画を見ているけど、あれは「何から何まで全部セットじゃないか。実際、行ってみなければ分かったもんじゃない」と思ったこともあります。

海の向こうというのは全く架空なんです。そして、海のこちら、日本のものというのは全部現実なんです。そして、海の向こうのものは架空であり、イメージであるが故に、限りなく素晴らしいものになりえます。

私たちは、ある時期フランスが、ある時期アメリカが、ある時期ソビエト、ロシアが、ある時期中国が、ある時期はインドが、素晴らしい国に思えた。そして、そこが理想郷なんだといった時代があります。しかし、次々に山のあなたの空遠く、幸いは住んでいないことが分かりました。

その時、私たちは簡単に、ああ、山の向こうにあるのもわれわれと同じなんだ。ニューヨークの生活もわれわれと同じ苦の世界なんだ、パリの生活もわれわれと同じせちがらい生活なんだと思うのです。それは、必ずしも間違っていません。ただ、その場合「同じなんだ」と思う時、実は、非常に多くのものを捨てて、見落としてしまっている。

秋田県の人は鹿児島県の人を、われわれと同じ日本人なんだと、これは正しいのです。しかし、同じだと思う途端に鹿児島と秋田の間にある異質なるものを見落としてしまいます。

むしろ、私たちは「違う」ということをまず見出して、違うものの間に、ちょうど契約書のようなさまざまな形で違うものの間を一つに結び得るような努力をするべきでしょう。その時、違うけれども、われわれの努力の結果、同じ物ができたという形になります。それが、むしろ、異質なるものとの関係の場合、望ましいことなんではないかと思います。

山のあなたの空遠くの時代、ニューヨーク、パリは日本とは絶対違う。あるいはアメリカというのは夢のような世界なんだ。憧れのハワイ航路なんだという時代は、もう完全に異質、別の世界なんです。

それが近くなってきますと、アメリカも同じ、フランスも同じということになる。これも、また間違いだと思います。今、ちょうど全然異質なる外国というものから、同質なる外国というように私たちのものの考え方が移りつつある、そこに私は危険を感じます。

私は、この次ぎの段階としまして、やはり外国は違うんだ。違うけれども、同じ人間であるが故に、さまざまな形で共存してもの事をやっていかなければならない。その違いを埋めるために、われわれはさまざまな努力をし、さまざまな企みをし、さまざまなソフトかハードのメカニズムを作り、そこで共通の土台を作っていかなければならない、それが、次ぎにくる、異国観というものであろうかと思います。

私たちは、これから先も、よその国とわれわれとの間の違いに驚き、親が子供を可愛がることは同じなんだというような、同質、同じものの発見に安堵の胸を撫でおろすことを繰り返すのですが、「違うからあれは異質のものなんだ」「同じだから仲間としてやっていけるんだ」ということでは駄目だと思います。

違うものとの間に同じものを建設していくという努力、これが、これからの国際関係で、あるいは異質なる民族、違う地方の人たち、いや、それだけでなく異性との、あるいは違う世代との人間関係を作っていく場合に、重要なことであろうかと思います。

長い間、ご清聴ありがとうございます。

講師紹介

三浦朱門（みうらしゅもん）

大正一五年　東京都生
昭和二三年　東京大学（旧）文学部言語学科卒業
日本大学芸術学部教授を務める。
日本文芸家協会常務理事
日本ペンクラブ理事
前文化庁長官

「箱庭」で新潮文学賞（昭和四一年）
第三三回芸術選奨文部大臣賞（昭和五八年）

著書

「冥府山水図」
「犠牲」
「旅は道づれ」
「光はるかに」他